

---

# シラユキ

台風X号

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シラユキ

### 【Nコード】

N9132R

### 【作者名】

台風X号

### 【あらすじ】

カンレキシリーズ第四弾、シラユキ。

女性トランスフォーマーの名前っぽいですが、男性トランスフォーマーです。雪の舞う頃編、第九軍編、オートボットの裏切り者編、第二軍編、破壊大帝との最後の決戦編の順になっています。（全56話）

## 第一話 サイバトロン星に正義の雪、シラユキ参上！

エグゼット  
XZと言われる危険なエネルギーを摂取したトランスフォーマーが襲ってきた。

オートボットの戦士、マックスボンドはXZをとりこんだトランスフォーマーを殲滅していた。

「くそ、数が多すぎる。」

オプティマス・プライムも殲滅するのに一苦労であった。

ネメシスディセプティコンの第3軍は、これを利用していたのだ。

第3軍リーダー、デッドオアアライブと第3軍副リーダー、ラグナツツは、高みの見物をしていた。

「オートボットをつぶす方法が、あってよかったぜ。」

「そうですねリーダー殿。」

「ふっ」

しかし、アルファフォースの光がサイバトロン星に近付いていた。

ウルトラマグナスは、電撃でXZを攻撃していた。

「次々と現れやがる。」

その時、サイバトロンの星に雪が降ってきた。

「この星に雪なんて降らないぞ。」

ウルトラマグナスは、そう言いながら、辺りを見回すとXZが雪に触れた途端、消滅していた。

「待たせたな。オートボットのみんな。」

新戦士 シラユキと相棒のウィンドセイバーともう一人の相棒のウィングボッツが参戦してきたのである。

「助かるぞ、伝説の戦士達。」

「ここからは、私達に任しといてください。総司令官！」

「分かった。オートボット全軍退却。」

「了解！」

シラユキは、アルファフォースから獣を取り出した。

「シラユキスーパーモード！」

ウィンドセイバーとウィングボッツは、XZを殲滅していた。

シラユキが、銃を戦艦に向けた。

「ブローイング・スノーフルバースト！」

戦艦に銃から放たれた光線が貫いた。

「なに、ラグナッツどうにかしろ！」

「戦艦が、大破していきます。このままでは俺達も危ないです。」

デッドオアアライブは、戦闘機に変形した。

「ラグナッツお前はここにいろっ！」

デッドオアアライブは、シラユキに向かって行った。

「来たな。アルファフォースよ剣を。」

シラユキは、剣を出した。

「行くぞ！フロンス・スノーソード！」

**第一話 サイバトロン星に正義の雪、シラユキ参上! (後書き)**

次回 第二話 第三軍消滅。お楽しみに!

## 第二話 第三軍消滅

「フロンロス・スノーソード！」

デッドオアアライブは、右肩のキャノン砲で撃った。

シラユキは剣でキャノン砲のレーザーを切り裂いた。

「なにっ！」

「私の攻撃から逃れられまい！ブリザードフォースエナジグル！」

物凄い速さで戦艦を切り裂くシラユキ。

「ラグナッツ、逃げろー！」

「えっ？」

シラユキはラグナッツを下半身と上半身に真っ二つにした後、デッドオアアライブの胸に剣を貫通させた。

「ぐわああああ、まさかこいつの力は・・・」

デッドオアアライブは大爆発を起こした。

第三軍は全滅した。

## 第二話 第二軍消滅（後書き）

次回 第三話 シラユキのアルファフォース。お楽しみに！



### 第三話 シラユキのアルファフォース

第三軍が全滅したことをネメシスディセプティコンは驚いていた。

「第六軍司令官、これはさすがに。」

「我々に、恐怖の時代が訪れたというのか。」

「なにを怖がる。立ち上がって殺せ！」

ネメシスディセプティコン破壊大帝メガトロンは、冷静かつ冷酷にシラユキのことを言った。

「あの程度の攻撃力でも立ち向かうがいい。それこそ、ネメシスディセプティコンの力だろうが。」

「確かにそうですが・・・」

「メガトロン様の言うとおりだ第八軍司令官。」

第三軍を失ったネメシスディセプティコンは、シラユキを討つ考えに乗り出し始めていた。

シラユキは、サイバトロン星であるオートボットにある計画に参加をしていた。

## 第三話 シラユキのアルファフォース（後書き）

次回 第四話 ウィンドセイバーの作戦。お楽しみに！

## 第四話 ウィンドセイバーの作戦

オートボット緊急会議に参加しているシラユキとウィンドセイバー。

「今後のネメシスディセプティコンの行動を把握しながら戦わなくてはならない。」

シラユキとウィンドセイバーは、会議終了後攻撃を受けた一人のオートボット戦士を見る。

「胸部を一撃でやられている。」

「こいつは、ひどいな。」

「どこかに敵が潜んでいるかもしれない。ウィンドセイバー探してくれないか。」

「了解、シラヌイ殿は。」

「此の事をオペティマスに報告する。」

「分かった。では行ってきます。」

「敵は、どこにいるかわからないぞ。」

「分かりました。」

ウィンドセイバーは、あたりを探しまわった。

そして、怪しげな動きをするトゥルバーズの一人、スカイガイを見つけた。

「いたいた。でもいきなり突撃ではあっさりだから。ひそかに襲って倒すか。」

ウィンドセイバーの作戦は成功するのか。

スカイガイは、攻撃されることを知らずに前に進んでいた。

「ついに、オートボットを倒したぞ♪」

「そうか、仲間を倒したのは君か。」

「なに！オートボットの新手！消え失せろ！」

「そう言われたって、はいそうですかって消え失せれるか。ウィンドストーリー！」

スカイガイの体が真っ二つになって爆発した。

「まあ、雑魚で良かった。」

一方、シラユキは……

「くっ、ブラックオプティマスだったのか。」

「その通りだ。シラユキ。」

## 第四話 ウィンドセイバーの作戦（後書き）

次回 第五話 強敵に対して無双の攻撃。お楽しみに！  
シラユキスーパームード再び登場です。

## 第五話 強敵に対して無双の攻撃

シラユキは、ブラックオプティマスに苦戦を感じていた。

「ウィンドセイバー、早く来てくれ。」

ブラックオプティマスの攻撃に苦しめられているシラユキ。

ウィンドセイバーは、シラユキを見つけた。

「黒いオプティマス。シラユキ殿！」

ブラックオプティマスは、ウィンドセイバーに気がついた。

「しまった。」

シラユキは瞬時にスーパーモードになり、ブラックオプティマスを止めた。

「ウィンドセイバー、いいタイミングで来てくれた。」

「少し遅れましたが。」

「構わない。それも考えのうちに入っていたから。」

「支援しますよシラユキ殿。」

「サンキュー！」

シラユキは、左手の剣でブラックオプティマスの右腕を斬り落とした。

「なにっ！」

ウィンドセイバーは、スピリットセイバーという攻撃を使った。

「ぐわあああ！小癩な！」

「ジャステイスブレンダー！」

ブラックオプティマスは体の一部を粉々にされて吹き飛ばされた。

## 第五話 強敵に対して無双の攻撃（後書き）

次回 第六話 伝説の戦士、カンレキ、シラヌイからの警告書。お楽しみに！



## 第六話 伝説の戦士、カンレキ、シラヌイからの警告書

ブラックオプティマスは、ボロボロの姿になっていた。

シラユキとウィンドセイバーは、ブラックオプティマスを注意深く見ていた。

「何か様子が変だ。」

「ブラックオプティマスからスパークを感じれません。どうもおかしいです。」

シラユキは、突然届いたカンレキとシラヌイという伝説の二人の通信を読み上げた。

「ブラックオプティマスには心がない。残酷なだけのゾンビである。下手をすれば我々のチームと同じ運命をたどる気をつけろ！」

「そういうことか。ウィンドセイバー、ブラックオプティマスに目にいいものを与えてやろう。合体だ！」

「了解、シラユキ殿！」

「シラユキ、ウィンドセイバー、リンクアップ！シラユキハイパーモード！」

ブラックオプティマスは、左腕を剣にして攻撃を仕掛けてきた。

「死ねえええええええ！」

シラユキは、十字の剣を大きく振り翳した。

「グランディスクロスブレード！」

ブラックオプティマスの体を微塵切りにした。

シラユキハイパーモードの強さは、想像以上である。

**第六話 伝説の戦士、カンレキ、シラヌイからの警告書（後書き）**

次回 第七話 知らぬ場所。お楽しみに！

## 第七話 知らぬ場所

惑星「デイスデティアム」でオートボットの感謝祭が行われている。オートボットの戦士たちが集い、歓迎を受けて盛大に盛り上がっている。

シラユキとウィンドセイバーも此処に参加して戦いの疲れを癒していた。

「シラユキ殿、少しエネルギーワインでも飲みましょうよ、」

「それがいいね。ウィンドセイバー、デイスプティコンの策略を今後も気をつけなければな。」

「シラユキ殿の言う通りでございます。」

一人のオートボット、リードサックルは何やら怪しい機械を持っていた。

その底には、デイスプティコンの紋章が描かれていた。

シラユキ達は、楽しくエネルギーワインを飲んでいた。

「リードサックル、どこにいたんだよ。」

「ごめん、ジックス。ちょっとゴミを捨てに行ってたただけだよ。」

しかし、そのゴミがやがてこのパーティーをめっちゃくちゃにする。

## 第七話 知らぬ場所（後書き）

次回 第八話 ゴミが第九軍を誘う。お楽しみに

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9132r/>

---

シラユキ

2011年12月2日17時51分発行